

http://www

知求会 EU 支部ニュースレター

# Newsreel World

2011年 9月 1日  
第2号

e-mail: leoshironeko@yahoo.co.jp  
facebook : Matsubara Mamiko

EU 支部長: 松原真実子 MATSUBARA Mamiko

プロフィール: 松原真実子 青森県八戸市出身 国際文化専攻修了  
富士通・ブラザーと民間企業を経てビジネス専門学校・東京情報大学で勤務  
3.11 千葉市勤務先大学内で被災。現在イタリアはミラノ近郊レッコ市滞在  
修士論文『異文化間コミュニケーションの研究—フィードバック作用』

## この号の内容

### 1 イタリア

福島の子供たちを招待

### 2 EU 支部だより

・放射能汚染を心配しない  
夏休み

・福島の子供たち 36 人

・生きるための支援

## イタリア 福島の子供たちを招待

—In Italia i bambini di Fukushima—



2011年7月28日、福島の子供たち8歳から12歳の計36名が、夏休みを過ごすためイタリアへ到着した。これは「Movimento delle Associazioni di Volontariato Italiane」と「la NPO Chernobyl heno kakehashi」による支援企画で、原発事故による放射能汚染を心配することなく、楽しい夏休みを過ごしてほしいと招待したものである。

これら支援団体は、チェルノブイリ原発事故以降、「生きるための支援」を目的に、毎年、チェルノブイリの子供たちをイタリアへ招待してきた。

今年は、福島第1原発事故をうけ、福島の子供たちも招待。8月31日までの1ヶ月間イタリアの5都市（Castel di Lago, Roma, Piacenza, Milano e Bari）に分かれて滞在し、ハイキングや水泳、小旅行等、放射能汚染を心配しない夏休みを満喫してもらう。

今後もこのような企画が海外国内ともにますます増え「生きるための支援」がさらに拡大していくことを願ってやまない。

## EU支部だより ー外国人の観る原発事故ー

心を打つ話がある。200人以上の原発退職者たちが事故を起こした福島原発の処理を願い出た。高レベルの放射能にさらされる若い社員たちの代わりになると自発的に志願した人たちだ。この一件を含めた、福島原発事故に関する海外の反応の一部を伝える。

○「社員が現場に残って作業を続けているのには心打たれた。危険が明らかな場所で、人々が責務を遂行している。民主主義先進国でこれが可能なんて信じられない。ドイツ人ならみんな残って作業するのを断るだろう」（ドイツ人：朝日新聞4月11日付投書欄）

○「欧州なら軍隊は出動するかもしれないが、企業の社員が命をかけて残るなんてありえない。まず社員が拒否するだろうし、それを命じる会社は反人道的とみなされる。大惨事になる危険があっても少人数を犠牲にしていけない」（オーストリア人：朝日新聞4月11日付投書欄）

○「社員も軍隊も警察も、誰もができるなら命をかけた作業にたずさわることは避けたいと考えるだろうし、また、誰も強制することはできない。だからこそ、イタリア人は国民投票で原発を拒否したのだ。」（イタリア人：5月1日独自調査）

○「自発的に志願するということは非常に勇敢で称賛に値する。しかし、まず私自身が考えることは、たとえ陸伝いに歩いたとしても、家族を安全な場所まで逃がすことである。だからこそ、イタリアは原発を拒否したのだ。」（イタリア人：5月1日独自調査）

私たちにとって心を打つ話しは、海外の人々にとっては、暗に犠牲を強いる反人道的な行動やシステムであったり、民主主義的ではないように映っている点もあるようだ。もちろん、欧米の民主主義が唯一の民主主義ではない。しかし、今後、我が国の民主主義をどうとらえ、どうすすめていったら更によいのか、今回の震災は、それを考える絶好の機会でもある。（松原）



・美談か反人道的か  
・民主主義とは  
・非常事態に問われる  
国と企業と個人の考え